

特別レポート・病院広報考（上）

病院広報誌は豪奢で ある必要はあるか—社会医療法人慈生会

病院広報のあり方を考える上で、最初に課題になるのが病院広報誌だろう。病院ごとに個性が現れている。必要最低限の情報を網羅したシンプルな広報誌がある一方で、書店に並んでもほかの雑誌と遜色ない豪奢な病院広報誌も出てきた。病院広報考では東京足立区の社会医療法人慈生会（伊藤雅史理事長）の広報誌「慈生会だより」を取り上げる。

■「スタッフの姿を伝えたい」

慈生会経営企画室広報部の大島茉野氏は、次のように話す。

「病院・介護施設のスタッフが懸命に医療や介護に取り組むリアルな姿を患者様や利用者様、さらにはご家族のこと

をしつかりと真剣に考えているのに、それがうまく伝わらず、勢い、ネガティブな印象を与えることもあります。患者様は、例えば医師ならば、診察室などでほんの短い時間しか、話すことができません。また、看護師や薬剤師、さらには理学療法士といったほかの医療職や事務系の職員などとも接すると思いますが、患者様の生活の中では、基本的に限られた時間です。人の命を扱っているだけに病院・介護施設のスタッフは日々、懸命に業務をしています。時にそれは、気ぜわしい状況になってしまいますが、そういった中でいると患者様は戸惑うでしょう。病院・介護施設のスタッフが、本当は患者様や利用者様、さらにはご家族のことを



広報部の大島茉野氏

ば、診察室などでほんの短い時間しか、話すことができません。また、看護師や薬剤師、さらには理学療法士といったほかの医療職や事務系の職員などとも接すると思いますが、患者様の生活の中では、基本的に限られた時間です。人の命を扱っているだけに病院・介護施設のスタッフは日々、懸命に業務をしています。時にそれは、気

せわしい状況になってしまいますが、そういった中でいると患者様は戸惑うでしょう。病院・介護施設のスタッフが、本当は患者様や利用者様、さらにはご家族のことをしつかりと真剣に考えているのに、それがうまく伝わらず、勢い、ネガティブな印象を与えることもあります。患者様は、例えば医師ならば、診察室などでほんの短い時間しか、話すことができません。また、看護師や薬剤師、さらには理学療法士といったほかの医療職や事務系の職員などとも接すると思いますが、患者様の生活の中では、基本的に限られた時間です。人の命を扱っているだけに病院・介護施設のスタッフは日々、懸命に業務をしています。時にそれは、気

せわしい状況になってしまいますが、そういった中でいると患者様は戸惑うでしょう。病院・介護施設のスタッフが、本当は患者様や利用者様、さらにはご家族のことをしつかりと真剣に考えているのに、それがうまく伝わらず、勢い、ネガティブな印象を与えることもあります。患者様から感想メールをいただけたのが、何よりの喜びでした」と

■表紙写真は副院長が撮影

慈生会だよりは、年4回発行している。等潤病院は昭和49年10月に足立クリニックとして開設したのが始まりで、現在までに50余年の歴史があるなかで、広報誌の歴史は約15年と決して長くはない。慈生会だよりは長らく、A3の1枚をA4サイズに折り込んだ4ページ仕立てだったが、2022年

は、表紙写真を表紙に採用させていている。大島氏は、「『最新鋭の医療機器を導入しました』といったお知らせにとどまらず、職員一人ひとりの医療や介護への思いが満載された誌面にしたいと考えています。その思いが通じたのか、最近、患者様から感想メールをいただけたのが、何よりの喜びでした」と

また、「病院・介護施設のスタッフは多忙な毎日を送っているだけに、自部署以外に関心をもつ余裕がありません。そこで、慈生会だよりを給与明細とともに職員に配布する取組みも始めました。グループ内の情報連携を支援するツールとしての役割も担っていると信じています」と患者・利用者向けというだけでなく、職員の交流を深めるための手段とも位置付けている。

慈生会だよりでは、等潤病院副院長で等潤メディケア診療所長の谷口泰之先生が撮影した写真が表紙を飾っている。大島氏は「谷口先生の写真を表紙に採用させていただいたのは、先生の才能を皆様にお伝えしたいということだけではなく、慈生会だよりをまず手にしてもらい、自宅に持ち帰つていただきたいからです」と説明する。

慈生会だよりの編集コアメンバーは6人。広報委員会は年間スケジュールを決める中で、各号でフォーカスするテーマを決めていく。大島氏は、「『最新鋭の医療機器を導入しました』といったお知らせにとどまらず、職員一人ひとりの医療や介護への思いが満載された誌面にしたいと考えています。その思いが通じたのか、最近、患者様から感想メールをいただけたのが、何よりの喜びでした」と

■誌面構成は理事長が考案

誌面構成はいたつてシンプルだ。表紙は患者や利用者、さらに家族の目を引くような写真を配置し、最後のページには、本院の等潤病院、等潤メディカルプラザ病院、それぞれ各科、さらには等潤メディケア診療所の医師の外来受診表を掲載している。冊子のページをめくっていくと、巻頭言から始まり、特定の疾患を取り上げた「症状・症例ガイド PICK

UP！」と続く。また、患者の療養に食の話題は欠かせないとして、「管理栄養士が教える！健康食生活のススメ」、さらに、「慈生会の現場人（ゲンバビト）」は定番のページになっている。紙面構成はもともと、伊藤理事長のアイデアがベースだ。

スマート世代を意識した工夫

毎号 特集を充実
慈生会だよりで力を入

慈生会たよりで力を入れていて
のが「特集」だ。最近の52号では、
ICT(情報通信技術=Information
and Communication Technology)
を取り上げた。慈生会のICTは
地域の病院の中で群を抜いてい
る。

慈生会がICT化を加速化させることになったのは、社会医療法人財団董仙会（石川県七尾市、神野正博理事長）恵寿総合病院と、社会医療法人高橋病院（北海道函館市、高橋肇理事長）への平成23年の視察だった。董仙会、高橋病院、それぞれの法人は、医療・介護のICT化に対して先進的に取り組んでいた。視察後すぐに慈生会のグループ施設でのICT化に着手。病院、診療所、老健を始めとする介護事業所、訪問診療などと電子カルテ・介護システムの相

ての話をまとめた「理事長コラム」、慈生会の医師の外部講演があれば、それぞれ二次元コードで閲覧できるようにしている。また伊藤理事長を「じくとるまーしい」という公式キャラクターにして、

入を促すように各サイトの二次元コードを誌面に配置している。さらに公式Instagramを立ち上げて、年4回の慈生会だよりで追いけない最新情報をアップデートしている。



互連携・情報共有化を始めた。電子カルテと連動して、ベッドサイドの患者やその家族が、提供された医療の内容、つまり、処方や検査結果、バイタルサインなどがわかるようにした。現在はベッドサイドのタブレットで閲覧が可能だ。さらにPHRシステム「カルテコ」が稼働している。

平成23年の東日本大震災、それに続く平成28年の熊本地震、そして最近では令和6年の能登半島地震、これらの大規模な地震などの天災のたびに、透析患者の診療継続への不安が取り沙汰されるようになつた。そこで、地震などの診療への影響を最小限に抑えて事業を続けるBCP（事業継続計画）のために患者と情報共有するツールとしてPHRを活用している。

慈生会は令和5年9月、地域医療における病院の未来の姿を示す「等潤メディカルプラザ」をオープンした。その中の腎センター等潤の患者は令和6年4月からPHRで透析情報を閲覧できるようになつた。透析情報については透析前の体重、血圧のほか、透析方法、ダイアライザ名、ドライエイト、

血液流量、抗凝固剤名称といったデータを把握できる。

■53号で「トータルリハビリケア」を特集

等潤メディカルプラザでは、リハビリテーションに力を入れている。医師によつて専門的なリハビリテーションが必要だと判断された要介護者が身体機能向上を目指す通所リハ「いきいき俱楽部等潤（ディケア）」、要介護者が自宅で自立した生活を送れるよう支援する通所介護「わくわく俱楽部等潤（ディサービス）」を新設し、すでにある本院の等潤病院と老健イルアカーサとの連携を強化。慈生会では、これらのリハビリテーション強化に向けた取り組みを「トータルリハビリケア」と名付けている。そこで、慈生会だよりの53号で「トータルリハビリケア」を特集した。

二次救急の指定を受けている等潤病院が、患者の早期在宅復帰を進める上で、病院と在宅との連携施設であるイルアカーサとの連携をより強化し、ディケア、ディサービスを新規に設置することで、患

者の在宅での日常生活の質の向上を目指している。ディケアにおける、トータルリハビリケアの具体的な取り組みとしては、高齢者の生活意欲や自立意識を高めることを狙いにした「おとの学校」を開催している。おとの学校とは主に高齢者施設でできるアクティビティで、特別な教科書を使つた授業は職員のアイデアで五感を用いたりICTを活用したりしながら回想法や運動を実施。おとの学校は職員のアイデアで五感を用いたりICTを活用したりしながら回想法や運動を実施。おとの学校は外部教材だが、収録されている体操は大島氏が振り付けと歌詞を考案したという縁がある。

慈生会だよりの特集ページでは、トータルリハビリケアについて分かりやすく解説するために、「等慈さん」という架空の患者を登場させている。その上で、リハビリを中心とした療養の経過を伝えつつ、現場の取り組みを紹介する手法を試みた。

■地域でのプレゼンス高める

人口減社会の到来を前に、病院は厳しい経営を余儀なくされる。その中で、地域に根付いた選ばれる病院としてのプレゼンスを高められるかが鍵になる。慈生会だよりはシンプルな誌面づくりだけに、医療や介護に取り組むスタッフの思い、さらには現場での奮闘ぶりがストレートに伝わつてくれる。

（えむでぶ俱楽部ニュース編集部
君塚靖）